巡回ワークショップ @男鹿・荒町町内会

巡回ワークショップ『むすび塾』は4月14日に、男鹿町庁舎の男鹿町内会会館で開催された。秋田県を中心に104人の職種者が参加し、1983年の日本海中部地震から30年。東日本大震災をきっかけに地域と津波への危機意識は高まっている。地域は平地で高台が少なく、避難場所まで遠いのが課題だ。住民14人が30年前の地震を振り返った後、今後の津波対策について、進行中の増災・防災支援機構（東京）の木村雄馬理事長に次々と質問をぶつけた。

むすび塾に参加して

男鹿・荒町町内会

津波避難車活用策探る

相互協力を考えたい

仙台市青葉区の荒町地区町内会会長 本多雄夫さん（66）
なだらかな海岸地域は、地域の防災の協議会を組織したほか、海びの避難経路を参考にしながら、被災者支援など、地域の課題を進める。体験が積まれた齒感で、地域との相互協力について考えていきたい。

記憶の伝承が課題

仙台市青葉区の荒町地区町内会会長 本多雄夫さん（66）
遠藤所長は学校任せではなく、住民が主体的に関わるように準備してほしい。数十年もたてば被災の記憶は薄れる。伝えていくことが課題だ。近隣の中高生を交えた避難訓練も検討している。